

みちしるべ

人になれ 奉仕せよ

みずからのために道しるべを置き みずからのために標柱をたてよ (エレミヤ31:21)

聖句： いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。

(テサロニケの信徒への手紙 I 5:16~18)

保育目標：	0歳児	・保育者と一緒に身体を動かして楽しく遊ぶ。	・秋の自然に触れる。
	1歳児	・自分の興味のあるものを見つけて楽しむ。	・秋の自然を楽しむ。
	2歳児	・自分から周りの人や物に関わって遊ぶ。	・秋の実りを喜ぶ。
	年少組	・神さまに感謝する。	・お世話になっている身近な人々に感謝する。
	年中組	・秋の実りを感謝する。	・まわりの人々にお世話になっていることを知り感謝する。
	年長組	・豊かな恵みに気づいて感謝する。	・働く人々に関心や親しみを持ち感謝する。

吹く風が冷たく、秋の深まりを感じます。9月10月と次々に大きな台風が到来し、各地に被害がもたらされました。今なお日常生活に戻れない方々も多くいることに心を痛めると共に、その方々に多くのなぐさめと癒しが与えられますようにと祈る毎日です。

秋の深まりと共に子どもたちの生活の中に意欲みなぎる姿や周囲の友達と共に力を合わせる姿があらこちらで見られるようになってきました。遊びの中でもやりとりが盛んになったり、道具作りや設定が細かくされていたりとひとつひとつに子どもの思いが表されていることを感じます。

先日子どもたちが木登りでぶら下がっていた桜の木が、重みに負けて一枝折れてしまいました。その場に居合わせた子は驚くと共に、「どうしよう。」と申し訳なさそうな表情でいっぱいになり、言葉に詰まっていました。「せっかくだから使えるように変身させよう。」とその木をとっておくことにしました。早速次の日、折れてしまった大きな枝を園庭の隅に出しました。その近くにいた年長組の女の子2人、「あつ昨日の枝だ。」と一人が思い出し、その時の状況をもう一人に話しています。「どうしようかなあ」とつぶやきながらノコギリを取り出してくると、「切るの?」「何になるの?」とロ々に尋ねてくる2人。「遊びの材料にしようか。」と切り始めると、その傍らで自ら枝についている葉や小枝を取り始めてくれました。そのうちに「おままと使えるかな」「木工の材料にしたら」など年長ならではのアイデアが出始めました。カゴいっぱいになった輪切りの木を「今度は皮をむいてみよう。」ということになり、ノミ代わりのマイナスドライバーと金槌で皮を削ぎ始めました。その様子を木工小屋から見ていた年長組の男の子が「それやってみる」と私から道具を受け取り黙々と作業に取り掛かり始めました。慣れてくると時に周りの様子を見渡したり、周囲の子に目を配ったりとそれはまるで職人のようでした。その彼の様子に吸い寄せられるかのように、周りには様々な学年の子どもたちが集まってきました。剥き残した皮を手で丁寧に取り除く年長組の女の子、「終わったらやりたい」と金槌とドライバーの順番をひたすら待つ年長組の男の子、やっていることに興味を持ちつつも「輪に加わっていること」に特別感を感じてウキウキ見よう見まねで木片を手取る年少組、輪の外側から一生懸命背伸びして覗く乳児クラスの子どもたち。その様子にこの時期ならではの子どもたちの育ちを感じました。関わろうとする対象は『木片』と共通していますが、それが何になるかは決まっていません。「見えない先」を一人ひとりが探りながら、想像しながら、主体的に考え関わっていきます。そこへのアプローチの道筋は人それぞれで、正解は何一つありません。自然と自分のやりたい作業、やるべき作業を見出し関わろうとする子どもたちの姿がありました。どの子もその子なりにこれまでの生活で遊びに没頭する心地よさ、人との距離や間合い、道具や物と向き合う術を学び得てきたのでしょうか。だからこそ、普段出会わない子どもたち同士が集ってきても否定することは一切なく、自然と互いを認め合う輪になったのだと感じました。子どもたち一人ひとりが熟していくこれからの時期、さらに充実した活動や関係が発展していくよう保育者も丁寧に一人一人の姿を読み取り関わることの大切さ、また心新たに保育へ励んでいこうと思わされました。

11月30日には創立70周年記念式典が予定されています。保護者の方や地域の方など多くの方にご支援、ご協力をいただき70周年を迎えることができました。神さまに守られてこれまで歩いてこられたことを心から感謝するとともに、これからも子どもたちが安心して力を発揮できる場所であり続けられるよう励んでまいりたいと思います。

主任 千葉 綾子